
バカと不良と青春記

五十嵐

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

バカと不良と青春記

【Nコード】

N6334U

【作者名】

五十嵐

【あらすじ】

男女問わず様々な意味で好かれる主人公（不良）が教師とのやり取りの間に書き記した青春日記（生活ノート）。

「好かれるつつつても、違う意味の方が多いけどな」

興味のなかった召喚戦争に巻き込まれていく内に、いつの間にか知り合いが増えていた。

「ほとんどが恨み買ったただけけどな」

「けど満更でもない様子の彼。」

「ブツ殺すぞ」

そんな彼の友情、恋愛物語。

※バカテスの二次創作だと分かりやすいように、タイトルを少し変えました。「不良とテストと青春記」で覚えてくださっていた方、申し訳ありません。また、お気に入り登録してくださいの方も、困惑させるような事をしてしまい申し訳ありません。これからお付き合い宜しくお願いいたします

人物設定

人物紹介

とうとうこうが
藤堂光雅

文月学園きっての不良。基本売られた喧嘩は買う質だが、喧嘩好き
と言うわけでもない。

頭は悪くはないのだが、なにぶん出席日数が少ないため、いいとも
いえない。

クラス分けを機に真面目に過ごそうと奮闘している。

手先が器用で、持ち歩いているショルダーの中には工具が入ってい
る。

雄二とは知り合いで、彼には「若」と呼ばれている。由来はヤクザ
の若頭から。（実際はただの一般人である）

男女問わず（色々な意味で）人気。

苦手教科は数学、化学、英語。

得意科目は国語、歴史、物理。

髪はオレンジ、目は茶色。

ピアスは左耳にリング状のものを二つ。

召喚獣

黒いスーツに長ドス。（ミスマッチ）

容姿は彼そのものがそのまま小さくなったもの。

何やら特殊能力を備えているようだ。

人物設定（後書き）

初投稿です。応援よろしくお願いします！

追記）故意じゃないんです。学園長の名字たった今しりました。

前回没にした作品の主人公が東堂だったのでちょっといじったら見事学園長の名字になってました。奇跡。

どうしよう。そのまま採用しても面白そうだけど・・・。

追加設定（前書き）

新しく増えた設定

追加設定

藤堂光雅

(前略)

機械弄りがすき。

ただし、知識は技術的なものばかりなようで、変わらず化学は苦手らしい。

召喚獣

カルサーゼ
改造の掛け声をキーワードに、改造モードになる。

装備は、ドライバー数本に作業用のゴーグル、ポーチ（未知の領域）、電気を纏った長ドス。武器改造や製作が出来るようになる。

機械好きな光雅の性格が出ているようだ。電気と水を応用した技を披露しているが、まだ何かあるのだろうか。

どうやら攻撃的な技が多いようで、彼自身の力量が垣間見える。

追加設定（後書き）

まだ増える予定です。

第一問

化学

問 以下の問いに答えなさい。

『調理の為に火にかける鍋を製作する際、重量が軽いのでマグネシウムを材料に選んだのだが、調理を始めると問題が発生した。このときの問題点とマグネシウムの代わりに用いるべき金属合金の例を一つ挙げなさい』

姫路瑞希の答え

『問題点・・・マグネシウムは炎にかけると激しく酸素と反応する為危険であるという点

合金の例・・・ジュラルミン』

教師のコメント

正解です。合金なので『鉄』では駄目という引っ掛け問題なのですが、姫路さんは引っかかりませんでしたね。

土屋康太の答え

『問題点・・・ガス代を払っていなかったこと』

教師のコメント

そこは問題じゃありません。

吉井明久の答え

『合金の例・・・・・・・・未来合金（↑すごく強い）』

教師のコメント

すごく強いと言われても。

藤堂光雅の答え

『問題点・・・・・・・・鍋に使用した一円玉が薄すぎた。もっと分厚く作れと申請するべき』

合金の例・・・・・・・・金属バット、もしくは鉄パイプ』

教師のコメント

何とか回答しようという熱意は伝わってきました。ただ、マグネシウムⅡ一円玉というその偏見を改め、（そもそも、一円玉はアルミニウムです。）困ったら何でも暴力関係で解決しようとするのは控えましょう。

「・・・眠イ」

頭の後ろで腕を組みながら、光雅は一人ごちた。

朝、七時。去年までの彼なら家で寝ている時間なのだが、今日の彼は早くからおきて、学校へ行く支度を済ませ、そして現在ここ、文月学園の校門前にやって来ていた。

季節を思わせる桜が校庭を取り囲み、咲き誇っている中で、光雅は校門にもたれかかり、空を見上げて目を細めた。

思えばこんなに朝早くから起きたのも久し振りで、ましてや外に出たことなどなかった彼にとって、柔らかな日差しと心地のいい風、まさしく朝と思わせるこの和やかな風景をこうして見、感じてることが不思議に思えた。

「珍しいな。こんな早くから」

「・・・よお、てっちゃん」

そんな彼に声をかけたのは、鉄人こと西村教諭。

片手を挙げて彼に答えた光雅だが、西村教諭はそれが気に入らなかったのか、眉間にしわを寄せた。そんなことは知りもしない光雅は、門から身体を離して西村教諭に向き直り、何かを強請るように手のひらを見せた。

「ああ、お前には何も言うまい」

「ああ、言っちゃって無駄だからな」

「せめてそのピアスぐらいは外さんのか」

箱から封筒を取り出しながら西村教諭はそう言ったが、それを受け取った光雅は気にも留めずにその封筒をズボンのポケットにねじ込んだ。

結果は分かりきっていることだし、どのクラスに入ったところで彼のすることは決まっている。

踵を返し、帰路に着こうとした光雅を、西村教諭は呼び止めた。

「学園長がお前に話があるらしい」

「・・・どうせろくなこったねえんだろ」

胡散臭げに舌打ちして光雅は職員玄関へまっすぐ歩く。

少しの段差を飛ばして登り、扉に手をかけてから、思い出したように光雅は西村教諭に声をかけた。

「ノート、机に置いとくぜ」

じゃな、と手をひらひら振って、光雅は扉を閉めた。

○月×日 光雅

今日は学校初日。取り敢えず教室には入ってみる。

教師のコメント

珍しく早く来たな。それが続けられるよう頑張れ。

第一問（後書き）

書き忘れがあったので、修正。

第二問

国語

問 以下の意味を持つことわざを答えなさい。

『(1)得意なことでも失敗してしまうこと』

『(2)悪いことがあった上に、さらに悪いことが起きる喩え』

姫路瑞希の答え

『(1) 弘法にも筆の誤り』

『(2) 泣きっ面に蜂』

教師のコメント

正解です。他にも(1)なら『河童の川流れ』や『猿も木から落ちる』、(2)なら『踏んだり蹴ったり』や『弱り目に祟り目』などがありますね。

土屋康太の答え

『(1) 弘法の川流れ』

教師のコメント

シュールな光景ですね。

吉井明久の答え

『(2) 泣きっ面蹴ったり』

教師のコメント

君は鬼ですか。

藤堂光雅の答え。

- 『(1) 鉋法にも筆の誤り』
『(2) 泣きっ面に鉋』

教師のコメント

間違えた漢字両方に含まれる金偏に何か作為的なものを感じてなりません。

あれから一時間は経っただろうか。

各クラスの生徒達は既に自己紹介を始めていて、廊下側に席がある生徒達は光雅の姿を見て目を丸くしていた。

学園長に長々と語られ、足が痛んだが、歩いているうちにそれも収まってきた。筋肉が解れたのだろう。

ふう、と息を漏らした光雅は新校舎と旧校舎を繋ぐ渡り廊下に差し掛かったところで足を止めた。

・・・この垣根を越えるか越えないかで、こうも違うとは。

気にしている場合じゃないと、光雅は再び歩を進める。

すると、少し先に柔らかなピンク色を見つけて歩幅を縮めた。

「お前もFクラスか？」

「わ、わっ！」

肩を震わせた少女は、慌てたように振り返る。

そこまで驚かせるつもりはなかったのだが・・・もう一度問おうかと考えたところで、少女が「はいっ！」と返事をした。

せわしなく動いた両手に気を取られながらも、取り敢えず少し声量を落とすように指示をした光雅。いくら自己紹介タイムとは言っても、今は授業中なのだから。

「なら、俺と同じだな。えっと・・・」

折れ掛けた看板にFの文字を見つけ、少女の背中を押す。

それと同時に教室の中から『ダアアーリーーン!!!』という野太い男達の怒声が聞こえて、思わず本当にここでよかったのかとプレートを見上げた。

「あ、あの、ここであつてと思います・・・多分」

「ん、だよ・・・なあ」

何となく入る気になれず渋っている光雅を見た後、少女は教室の中を覗く。

その後も教室の中から名前だけを告げる単調な声が聞こえてくる。暫く経った頃に少女が光雅に声をかけた。

「あの、入らないんですか？」

「いや、入る」

仕方なく、教室に入った少女の後に続く。

失礼します、とか細い声で告げた少女に、クラス中が静まり返った。後に続いた光雅を目にして、さらに。

少女と光雅、交互に浴びせられる視線に落ち着かないのか、光雅は教室から薄汚い廊下へと目を向けた。教室の中も薄汚かったので、あまり変わりはしなかったが。

徐々に騒がしくなってくる教室の中でクラス担任の福原教諭だけが冷静に、少女に自己紹介を進めた。

美女と野獣だ、なんて声、光雅には聞こえはしない。

「あの、姫路瑞希といいます。よろしくお願いします・・・」

視界の端でもごもご動くピンクにちらりと目をやって、その頭に手を載せる。ほわあっ！と妙な声を上げた少女・・・もとい、姫路の頭をぐいっと手前に持ってきて、光雅は口を開いた。

「藤堂光雅だ。・・・よろしく」

それだけ言うと、姫路の頭を放して彼は教室の一番後ろに腰を下ろした。

何故だか隣に座る少年が禍々しい視線を向けてくるが、どうやら手を出してくる気はないらしい。

両手を両脇についてゴロリと寝そべった光雅は、割れた窓からくるすきま風に当てられながら目を閉じた。

第三問

一方。

眠りについた光雅に憎しみという名の熱意のこもった視線をぶつけ続ける人物がいた。

彼の名は吉井明久。バカの代名詞である『観察処分者』の名を持つ彼は、先ほど光雅と共に教室に入ってきた姫路瑞希に想いを寄せている。

少しでも冷静に考えてみれば、たまたま偶然一緒に入ってきたのだろうと推測を立てられるものだが、そんな余裕は彼にはない。

しかし、だからといって見るからに喧嘩早そうな光雅に手を出せるほど強くもなければ、思い切って「姫路さんは僕のものだ!」と宣言できるほど果敢な人間でもなく。

この恨みはらさしておくべきか、と心中で葛藤していた彼だが、すぐ近くに腰を下ろした姫路に気づいて視線をそちらに向けた。

「あのさ、姫——」
「姫路」

声を掛けようとした明久を遮るように、彼の親友であり、Fクラスの代表である坂本雄二が姫路に声をかける。

あまりにピッタリなタイミングに、明久は心の中でうちひしがられた。

「坂本だ。坂本雄二。よろしく頼む」

「あ、姫路です。よろしく願いします」

「ところでだが・・・」

深々と頭を下げた姫路。そんな彼女に、雄二は内緒話でもするかのように小声で話し始めた。

小声でも聞こえやすい様に、右手を口の横に当てた雄二は、チラリと光雅を見た。

いまだに夢の中にいる彼は、安らかな寝息を立てている。

「姫路はわ・・・いや、光雅の知り合いか？」

「え？あ、いえ、さっき廊下で声をかけられて・・・」

「・・・そうか」

わかった、と一つ頷いた雄二は、何でもなかった様に急に話を変える。

「ところで、姫路の体調はいまだに悪いのか？」

「あ、それは僕も気になる」

思わず口を挟んでしまった明久に、姫路が大層驚いた。

「・・・雄二、ちょっといい？」

ほんの少し叩いただけでゴミ屑と化した教卓に、福原教諭は替えを用意する、と足早に教室を出た。

改めてこのクラスの酷さを思い知った明久は、自分達だけならともかく、体調不良だけが原因でこのクラスにやってきた姫路の身を案じて、あくびをしているクラス代表に声をかけた。

「ん？なんだ？」

「ここじゃ話にくいから、廊下で」

「別に構わんが」

立ち上がって、廊下に出る。その時、一瞬だけ姫路と目があつたように感じた明久だが・・・。

「ちょ、ちょっと雄二！なにしてんのさ！！」

「何って？」

さも当たり前のように親友が引きずっているものを見て、明久は顔を青くした。

これでは注目されたのも無理はない。雄二が引きずっているものは、物ではなく人だった。

それも、そこらへんの人間ではない。

ずらした視線の先には、引きずられていても尚、眠りこける光雅の姿。学園一（悪）名の知れた不良の姿に、明久は戸惑いを隠せない。

「ああ、心配すんな。お前の言いたい事は分かってる」

「絶対分かってない！分かってたらそんなことするか！」

「大丈夫だ。害はねーよ。何たってコイツの二つ名は『大人しい不良』だからな」

「まさか雄二、その人と知り合いなんてこと・・・」

ほら、起きろ、と光雅の頬をペシペシ叩く雄二に、明久はおろおろしながらどこか身を隠す場所はないか辺りを見回した。

大人しい不良とは。

文月学園二年生、藤堂光雅に称された二つ名で、あまりにも不良と呼べる柄じゃない彼にとある彼の悪友がつけた。

「ていうかつけたの絶対雄二だよね！」

別名、触らぬ不良に祟りなしであり、彼の癪に障ることを言わない限り平和な学園生活を送れるだろう、という意味だ。

「・・・んだよ、雄二か」

「よっ、若。久し振りだな」

「ていうか何でその人連れてきたんだよ・・・」

目を開けて起き上がった光雅に、逃げ切れなかったことを悟った明久はせめて、自分を巻き込んだ理由だけでも聞いてみようと思ふ雄二に問いかけた。

「お前が今回俺に頼もうとしてることに、コイツが大きな力になれるからだ」

「！」

何故分かった！そう、丸々と顔に書いたような表情をした明久の顔を、光雅は見た。

すると明久は、獣とでも相対したかのように彼から目を離さず二、三歩後退する。

失礼だとは思わんのか、と呆れ気味に息をついた雄二は、二人の微妙な距離を取り持つようにその間に立った。

「お前の考えはこうだ。健気で可愛い姫路の為にこの薄汚い教室をどうにかできないだろうか」

「ちょ、雄二！」

「ああ、でもおバカな僕にはどうすることも出来ない・・・！そうだ！天才で素敵で頭がいい親友に相談しよう！」

「自分で頭がいいって二回も言うな！」

憤慨したように叫んだ明久に構わず、雄二は続ける。一人取り残される光雅。

どうしようかと頭を掻いた後、光雅はポツリと言葉をつむいだ。

「試験召喚戦争・・・か？」

「そう、それだ。Aクラス相手に試召戦争をやる」

「それで、俺に力を貸せ、と・・・」

「そういうところだ」

力を貸してくれるな？と続けた雄二に、光雅は顎に手を触れて眉間にしわを寄せた。

ほら、怒ってるじゃないか！と涙目で雄二に訴えた明久の顔を見て、光雅は明久に手を差し出す。

え？と首をかしげた明久に、顔を綻ばせてよしと頷く雄二。

「藤堂光雅。好きに呼んでくれ」

「あ、え、僕は吉井明久・・・です」

「本来ならめんどくせーことはしたくねえんだが、やってやる」

そっぽを向いてそういった光雅に、明久はようやく差し出された右手の意味を理解し、その手を握った。

同日 光雅

俺は別にあのクラスでもいいと思ったけど。

教師のコメント

そう思えるのは恐らく君だけです。

第三問（後書き）

いろいろ脱線してしまい申し訳ありません。

第四問

「――FクラスはAクラスに『試験召喚戦争』を仕掛けようと思う」

Fクラス代表、坂本雄二は戦争の引き金を引いた。

英語

問 以下の英文を訳しなさい。

[This is the bookshelf that my

grandmother had used regular
y.]

姫路瑞希の答え

「これは私の祖母が愛用していた本棚です」

教師のコメント

正解です。きちんと勉強していますね。

土屋康太の答え

「これは

」

教師のコメント

訳せたのはThisだけですか。

吉井明久の答え

「☆●◆▽「♪*×

」

教師のコメント

できれば地球上の言語で。

藤堂光雅の答え

「これはです？本？？私の？？？使ってい」た

教師のコメント

取り敢えず読めなかったらではでなで済ますのはやめましょう。

『勝てるわけがない』

『これ以上設備を落とされるなんて嫌だ』

『姫路さんがいたら何もいらない』

多種多様の悲鳴ともいえるざわめきが教室内のいたるところから上げられる。

が、それもすぐに止んだ。雄二の横でボロボロの黒板にもたれかかる光雅がクラス中を射るような目で見たからだ。

何であいつがあんなところに、と尋ねたい者はたくさんいたが、結局口を開くものはいなかった。雄二が彼を教卓の横に立たせた理由の一つである。

文月学園には、化学とオカルトと偶然により完成された『試験召喚システム』と呼ばれるものが存在する。これは、テストの点数に応

じた強さを持つ『召喚獣』を喚び出して戦うことの出来るシステムで、教師の立会いの下で行使が可能となる。

学力低下が嘆かれる昨今、生徒の勉強に対するモチベーションを高めるために提案された先進的な試み。その中心にあるのが、召喚獣を用いたクラス単位の戦争——試験召喚戦争と呼ばれる戦いだ。

勿論己のテストの結果で召喚獣の強さが変わるため、ここで重要になるのがテストの点数である。が、しかし優秀な生徒ばかりが集まるAクラスと、学園一のおバカが集まるFクラスでは、力の差は歴然だ。

「そんなことはない。必ず勝てる。いや、俺が勝たせてみせる」

その圧倒的な戦力差を知りながら、それでも雄二はそう宣言した。

『何を馬鹿なことを』

『できるわけないだろう』

『何の根拠があってそんなことを』

否定的な意見が教室中に響き渡る。が、それもまたすぐに止んだ。光雅の目が、黙って話を聞けと語っている。少なくとも明久にはそう見えた。

「根拠ならあるさ。このクラスには試験召喚戦争で勝つことの出来る要素が揃っている」

雄二の言葉を受けて、クラス中がざわつく。これくらいならば許容範囲なのか、光雅は黙って目を閉じた。

学年最下位のこのクラスに、はたして勝ち目はあるのだろうか。そんな疑問を汲み取って、雄二は不敵な笑みを浮かべた。

「おい、康太。畳に顔をつけて姫路のスカートを覗いてないで前に来い」

「・・・・・・・・・・・・・・・・！！（ブンブン）」

「は、はわっ」

必死になって顔と手を左右に振り否定のポーズを取る、康太と呼ばれた男子生徒。だが、姫路にはスカートを押さえながら距離をとられてしまった。

壇上へと歩き出した彼の頬には、しっかりと畳の跡が付いている。手で隠しても隠しきれるほど小さな跡ではないし、否定しても信じるものはいない。

「土屋康太。こいつがあ有名な寡黙^{ムツリーニ}なる性癖者だ」

「・・・・・・・・・・・・・・・・！！（ブンブン）」

『ムツツリーニだと・・・・・・・・？』

『馬鹿な、ヤツがそうだというのか・・・・・・・・？』

愚か者二人の疑問符に答えるものはいない。ギンツと、恐怖の扉（光雅の瞼）が開いたからだ。

いい加減にしろ、と語る光雅の目は、暗がりでも光る肉食獣の目だった。

た。

ムツツリーニとは。

男子生徒には畏怖と畏敬を、女子生徒には軽蔑を以って挙げられる名だ。要するに、ただのムツツリスケベである。

たとえどういった状況であろうと、己の下心は隠し通そうとする。その異名は伊達ではない。

「姫路のことは説明する必要もないだろう。皆だってその力はよく知っているはずだ」

「えっ？わ、私ですかっ？」

「ああ。うちの主戦力だ。期待している」

本来なら彼女の实力はAクラスレベルだ。その事はFクラス全員が知っている。

『彼女ならAクラスにも引けを取らない』

『ああ。彼女さえいれば何も入らないな』

ダンッと黒板が叩かれた。ただでさえボロいのだが。バカは学習しないとは、どうやら本当らしい。

「木下秀吉だっている。当然俺も全力を尽くす。そして、いまここにいる——」

雄二の手と視線につられて、Fクラス一同は彼の左手側に目を向けた。そこにいるのは、先ほどから一同を牽制し続けている――

「――藤堂光雅もそうだ」

一瞬にして、教室中が固まった。

それに関しては特に何の感情も抱かないのか、光雅は黒板から身体を離れた。

「まあそう怯えるな。お前等が思っている以上にいい奴だ。そして、今回の試召戦争の要といってもいい」

雄二の説明を受けて、光雅は教卓の前へ出る。同時に前列が一步後ろに後退した。

「こいつは、教師の立会いがなくとも召喚獣が召喚できる」

途端、静かだった教室がざわつき始めた。

そんな話は聞いたことがない。学力が良くもない彼が何故。

「特例の場合と、試召戦争の時のみだな」

喋った！ずっと黙っていた般若が喋った！再び恐怖する一同。
だが、教師の立会いなしで召喚獣を召喚できるのは、確かに都合が
いい。

いざとなったら、相手の懷に忍び込むことも容易くなる。

いけるかもしれない。教室内の士気は確かに高まっていた。

「それに、吉井明久だっている」

・・・シンー。

そして一気に下がった。

「ちょっと雄二！どうしてそこで僕の名前を呼ぶのさ！全くそんな
必要はないよね！」

『誰だよ、吉井明久って』

『聞いたことないぞ』

「ホラ！せっかく上がりかけてた士気に翳りが見えてるし！僕は雄
二たちと違って普通の人間なんだから、普通の扱いを——って、何
で僕を睨むの？士気下がったのは僕のせいじゃないでしょう！」

Fクラス全員の目にさらされた上、理不尽な扱いを受けた明久。
そんな彼の言葉をスルーして、雄二は続けた。

「そうか。知らないなら教えてやる。こいつの肩書きは『観察処分者』だ」

『・・・・・・・・それって、バカの代名詞じゃなかったっけ？』

クラスの誰かが、そんな致命的な台詞を口にする。

「ち、違うよっ！ちよっとお茶目な十六歳につけられる愛称で」

「そうだ。バカの代名詞だ」

「肯定するな、バカ雄二！」

観察処分者とは。

学生生活を営む上で、問題のある生徒に課せられる処分で、教師の雑用係である。

普通、召喚獣が触れられるのは他の召喚獣のみであるが、特例として物に触れるようになった召喚獣を使い雑用をこなす。

ただ、その代償として召喚獣の負担の何割かが本人にフィードバックするという短所があった。これも、観察処分者に対するペナルティの一環である。

因みに、光雅も観察処分者ではあったが、「学校に来ない＝雑用しない」であった彼には無意味であったために取り消された。

Fクラスにしてみれば、おいそれと召喚できない足手まといが増えただけで。

「気にするな。どうせ、いてもいなくても同じような雑魚だ」

「雄二、そこは僕をフォローする台詞を言うべきところだよな？」

「とにかくだ。俺達の力の証明として、まずはDクラスを征服してみようと思う」

「うわ、すごい大胆に無視された！」

かくして、Fクラスの試験召喚戦争は始まるのであった。

同日 光雅。

悪友の友達に対する扱いはどうなんだろう。

教師のコメント

よくわかりませんが、友達だからこそではないでしょうか。

第四問（後書き）

主人公の特例の理由は後ほど書こうと思います。

第五問

「騙されたあつ！」

悲痛な叫び声を上げて教室に転がり込んできた明久を見て、雄二はやはりそうきたか、と臆面もなく言い放った。

Fクラスの宣戦布告の使者として雄二に駆り出された明久だが、下位勢力の宣戦布告の使者は大抵酷い目にあう。

それを知っていながら尚も親友の、騙されたと思っていったこい、その言葉に、彼は勇ましくもDクラスに乗り込んでいったのだが・・。

結果はこの通りだ。

「やはりってなんだよ！ やっぱり使者への暴行は予想通りだったんじゃないか！」

「当然だ。そんな事も予想できないで代表が務まるか」

「少しは悪びれろよ！ 大体、僕が行かなくてもこのクラスには確実に暴行を受けない人物がいるだろ！」

ビシッと、明久の人差し指が後ろ手で光雅を指した。

振られた光雅はあ？と話の中核である明久と雄二に顔を向ける。それに怯みながらも明久は続けた。

「わざわざ僕に頼まなくても！」

「…………吉井よお。それはムシが良すぎるだろ。何とかしたいって本当に思ってたんなら少しは自分で動け」
「うっ」

もつともな光雅の意見に、明久は返す言葉もない。

「吉井君、大丈夫ですか？」

Dクラスによる数々の暴行を受け、所々破れてしまった明久の有様を見て姫路が駆け寄った。

そんな様子を尻目に、光雅は一つ欠伸をする。大きく開いた口から犬歯が見えた。

「それより今からミーティングを行うぞ」

扉を開けて出て行った雄二を見て、光雅も跡を追う。彼の友に対する扱いには何かが欠けている気がするが、あまりに分かりきっているために誰も確認しようとはしない。

どうやら屋上に向かうらしい。授業をボイコットする場合、屋上は最適の場所だ。だからといって、今はボイコットしているわけではないが。

雲ひとつない澄み切った青空から眩しい光が差し込む。穏やかな風とその光に眠気を誘われたのか、光雅は本日三回目の欠伸をしてその辺に腰を下ろした。

柔らかなオレンジの髪が、陽光を受けてより鮮やかに見えた。

「明久。宣戦布告はしてきたな？」

雄二がフェンスの前にある段差に腰を下ろす。

「一応今日の午後に関戦予定と告げて来たけど」

皆がそれにならって各々腰を下ろした。

「それじゃ、先にお昼ご飯ってことね？」

問いかけた島田と、その周りの級友達に目を向けて、光雅は自分のズボンポケットに入っているものに気が付いた。

「そうなるな。明久、今日の昼ぐらいはまともなものを食べろよ？」

「そう思うならパンでもおごってくれと嬉しいんだけど」

「えっ？ 吉井君ってお昼食べない人なんですか？」

姫路が驚いたように声を上げる。

「いや。一応食べてるよ」

「……………あれは食べているといえるのか？」

「何が言いたいのさ」

「いや、お前の主食って——水と塩だろう？」

光雅が顔を上げる。

友からの哀れむような視線を受けて、明久はさも心外そうに言う。

「きちんと砂糖だって食べているさ！」

「あの、吉井君。水と塩と砂糖って、食べるとは言いませんよ……

……」

「舐める、が正しい表現だろうな」

「おい吉井」

突如割り込んできた光雅の声に、明久は驚いてそちらを見る。

眉間によった皺は怒っているようにも見えるが、いい加減明久は気づいていた。眉間にしわ寄せは彼のデフォルトなのだ。

光雅が突っ込んでいた手をポケットから抜いて、明久に向けてあるものを投げる。

綺麗な円を描きながら飛んでくるそれを受け取った明久は、手の中にあるものを見て目を丸くした。

「え、飴？」

よくある有名な棒つきキャンディだ。赤い包み紙に包まれて、中から仄かに甘い匂いがする。

「やる」

それだけ言うと光雅は再び欠伸をした。

イチゴ味。何だか似合わないが、彼はいつもこんなものを持ち歩いているのだろうか。

「あ、ありがとう」

ありがたく頂くことにした明久。

それを見て、姫路が明久に声をかけた。

「・・・あの、良かったら私がお弁当作ってきましようか？」
「あ？」

余程驚いたのだろうか。聞き返した明久のえ？が、何だか違って聞こえた。

「本当にいいの？」

「はい。明日のお昼で良ければ」

「良かったじゃないか明久。手作り弁当だぞ？」

「うん！」

「・・・ふーん。瑞希って優しいんだね。吉井だけに作って

くるなんて」

面白くなさそうにそういった島田の言葉。

やけに“だけ”が強調されていたように感じたのは、気のせいではない。

「あ、いえ！その、皆さんにも……」

「俺達にも？いいのか？」

「はい。嫌じゃなかったら」

やはり健気な姫路の反応に、明久は感動しているようだ。

それは楽しみだ、と秀吉、康太、島田も頷いた。

そんなやり取りの後、全員の視線が光雅に向いた。

何だか妙な感じの視線に気づいた光雅が、何だよ、と首をかしげた。

「あの、光雅さんもうですか？」

「あ？あー」

気の抜けたような声を上げたあと、何故か照れたように頭を掻いた光雅に、明久が反応を示した。

どうするかを考えているというより、言おうか言うまいか迷っている様子だ。

「……………ああ、姫路。こいつの事は気にするな」

「え、なんでですか？」

「言うなよ、雄二」

咎めるように雄二を睨んで、光雅は申し訳なさそうに姫路に告げる。

「・・・悪イ。遠慮しとく」

「・・・さて、話がかかり逸れたな。試召戦争に戻ろう」

話の腰を折るように、雄二がそう言った。その言葉に、全員が雄二を見る。

「雄二。ひとつ気になっていたんじゃが、どうしてDクラスなんじゃ？ 段階を踏んでいくならEクラスじゃろうし、勝負に出るならAクラスじゃろう？」

「そういえば、確かにそうですね」

「まあな。当然考えがあつてのことだ」

雄二が鷹揚に頷く。

「色々理由はあるんだが、取り敢えずEクラスを攻めない理由は簡単だ。戦うまでもない相手だからな」

「え？でも、僕らよりはクラスが上だよ？」

この学園のクラス分けは、成績によって分けられているので、Eクラスは当然Fクラスよりも振り分け試験の点数は高い。

「ま、振り分け試験の時点では確かに向こうが強かったかもしれないな。けど、実際のところは違う。オマエの周りにいる面子をよく見てみろ」

「えーっと・・・・・・・・」

言われるがままに面子の顔を見回す明久。

「美少女二人と美形一人、馬鹿が二人にムツツリが一人いるね」

「誰が美少女だと!?!」

「ええっ!?! 雄二が美少女に反応するの!?!」

「・・・・・・・・・・・・・・・・(ポツ)」

「ムツツリーにまで!?! どうしよう、僕だけじゃツツコミ切れない!」

「まあまあ。落ち着くのじゃ、代表にムツツリーニ」

実際に美少女である秀吉(♂)が牽制に入った。

光雅はというと、このノリとテンションについていけないのか、疲れたような顔をしていた。

「ま、要するにだ」

咳払いをして雄二が説明を再開する。

「姫路に問題がない今、正面からやり合ってもEクラスには勝てる。Aクラスが目標である以上はEクラスなんかと戦っても意味がないってことだ」

「？それならDクラスとは正面からぶつかると厳しいの？」

「ああ。確実に勝てるとは言えないな」

「だったら、最初から目標のAクラスに挑もうよ」

確かに、もったもな話だ。

Dクラスに勝てないようではAクラスには手も足も出ないだろうが、負けるかもしれないと分かっているなら初めからAクラスを相手にしたほうが楽なのは確か。それ以前に、Dクラスと戦って敗れたら元も子もない。

「初陣だからな。派手にやって今後の景気づけにしたいだろ？それに、さっき言いかけた打倒Aクラスの作戦に必要なプロセスだしな」
「えっと、その。さっき言いかけた、って……吉井君と坂本君は、前から試召戦争について話し合っていたんですか？」

「ああ、それか。それはついさっき、姫路のためにとって明久に相談されてむぐっ！」

いつの間にか雄二の真正面に迫っていた光雅がその口を塞ぐ。

「余計な茶々を入れるな」

「ありがとう光雅！」

言ってしまったから、明久は慌てて口を押さえた。

「あ、ごめん。勝手に名前で呼んで・・・」

「別に構やしねーよ。好きに呼べって言ったのは俺だしな」

「あ、じゃあ光雅も僕のこと名前で呼んでよ」

「・・・ああ」

「何！その間は！」

ここに誕生した新たな芽生えに、女子二人が複雑そうな目でそれを見ていた。

唯一、秀吉がほほえましそうにその光景を見ている。

「それはそうと、勝てるの？Dクラスに勝てなかったら意味がないよ」

「負けるわけないさ」

光雅から解放され、雄二がそう言って笑い飛ばした。

「お前らが俺に協力してくれるなら勝てる」

何か確信があるのだろう。迷いも何もない声で、雄二は言い切った。

「いいか、お前ら。ウチのクラスは——最強だ」

その一言で、全員の心に火がついた。

打倒Aクラス。

それはきつととても困難なことで、絵空事のような話だ。出来るかどうか分からない。

だが、やってみないと何も始まらないのも事実だった。

「それじゃ、作戦を説明しよう」

涼しい風がそよぐ屋上で、彼らは勝利のための作戦に耳を傾けた。

同日 光雅

下の名前で呼び合える仲間が増えた。

教師のコメント

何度も消した後があるが、もしかして恥ずかしかったのか？

第五問（後書き）

はやくも1500PVありがとうございます。

追記）ミス報告ありがとうございます！書いてて気づかなかった・
・！

再びこうならぬよう気をつけますが、また見かけたら報告お願いします。

第六問

数学

問 次の問に答えなさい

『(1) $4 \sin X + 3 \cos 3X \parallel 2$ の方程式を満たし、かつ第一象限に存在する X の値を1つ答えなさい。

(2) $\sin(A+B)$ と等しい式を示すのは次のどれか、?
?の中から選びなさい

? $\sin A + \cos B$? $\sin A - \cos B$

? $\sin A \cos B$? $\sin A \cos B + \cos A \sin B$ 』

姫路瑞希の答え

『(1) $X \parallel \pi/6$

(2) ?』

教師のコメント

正解です。角度を『 $。$ 』ではなく『 π 』で書いてありますし、完璧です。

土屋康太の答え

『(1) $X \parallel$ およそ3』

教師のコメント

およそをつけて誤魔化したい気持ちも分かりますが、これでは解答に近くても点数はあげられません。

藤堂光雅の答え

『

』

教師のコメント

この問題にいたっては放棄ですか。

試験召喚戦争は既に始まっていた。

怒声や悲鳴が聞こえる中、光雅はFクラスの中枢となる場所に立っていた。勿論、前列が突破された時の為でもあるが、彼にはほかに大事な任務があった。

屋上で、雄二から受けた指令。Fクラスの状態と能力、そして強さを見ておいてくれ、とのことだった。

ふう、と息を着いて、光雅は辺りを見回す。言わずとも、士気は上々だ。敵もまだここまで来てはいない。前線の者が頑張ってくれて

いるのだろう。

「じゃあ光雅、僕達行ってくるよ！」

「おう」

Fクラスの防御壁達（Fクラス守備軍）の奥から、明久がそう声を上げた。人ごみの中、姿は見えないが、光雅は返事をした。

実は、結構明久が羨ましかったりする。決して好戦的ではない光雅だが、じっとしているのは性に合わないらしい。だからといって持ち場を離れるわけにもいかないので、光雅は黙って座り込んだ。

試験召喚戦争の間は、教師の立会いがなくても試験召喚ができる光雅であったが今は必要ないと、制服の下に隠されたショルダーに手を伸ばす。

（・・・駄目か）

改めて周囲を見回した光雅は、立ち上がって頭を掻いた。許可が出れば動けるのだが・・・。

苛立ちながら、立ったり、座ったりを繰り返す光雅は、はたから見れば異様な光景だったらしい。

そんな異様な光景を見た雄二は、溜息をひとつついた。

「おい若さんよ。オマエ最後に召喚したのはいつだ？」

「あ？確か、三ヶ月ぐらい前・・・か」

「・・・いざという時にお前をここにおいたんだが、ここじゃ観察

の意味もなさそうだしな。肩慣らしぐらいなら許してやるよ」

手でしっしつと追い払うしぐさをした雄二に、光雅は右手の親指を下に向けた。意識、地獄に落ちろ。

上から見下したような物言いだったが、まあそれでも許可をくれたのには変わりはない。Fクラスの陣の間を縫うようにして、光雅は前戦に飛び出した。

なるほど、持ちこたえてはいるもののかなりの劣勢のようだ。

「あれ！？光雅！援軍なら必要ないって！」

「援軍？ちげーよ、肩慣らしだ」

『おい、あいつ確か、別名大人しい不良の藤堂光雅じゃねえか！？』
『何！』

彼の知名度もなかなかのものらしい。

明久に現状の説明を受けながら、光雅は首の骨を鳴らした。バキッバキッと響くその音に恐怖するDクラス達。

準備運動もそこそこに、光雅は肩の力を抜くと、腰を落とした。

「試獣召喚」
サモン

歪な魔方陣のようなものが、光雅の足元に現れる。くるりと一回転して彼の姿をそのままデフォルメした召喚獣が地に脚をつける。

黒い帽子、黒いスーツ、黒いくつに黒いサングラス。マフィアを思

わせるその姿に、明久は改めて（いろんな意味で）すごい思ったが、何故か腰の黒ベルトには長ドス。そこだけ残念だ。

『怯むな！やれ！』

「光雅！」

三人がかりとは、卑怯な！

思わず心中でそう叫んだ明久。よりによって教科は、光雅の苦手とする数学。

『Dクラス

川瀬博人 & a m p; 由良好摩 & a m p;

坂根大樹

数学

49点

46点

51点

』

三人の点数を合わせれば、146点。Fクラスレベルが倒せる相手ではない。

・・・しかし。

『何っ！？』

三匹の召喚獣の攻撃は、光雅の召喚獣には届いてはいなかった。全てが、一本の細長いドスで受け止められている。

「抜かったな」

『Fクラス

藤堂光雅

世界史

252点

』

『せ、世界史だとおっ!?!』

『馬鹿な、何故世界史があ!?!』

光雅の召喚獣は、教師の立会いなくとも召喚獣が召喚できる。

普通、召喚フィールドは、『干渉』されると消えてしまうが、彼の場合、召喚獣の召喚にフィールドは必要ないので、『干渉』も起きないし、そのフィールドに感化されない。

彼の召喚獣が、鋭い視線を携えたままに長ドスを抜いた。

「戦死したものは補習!」

たった今光雅の手によって戦死した生徒の断末魔を聞きながら、明久は喜びで一杯だった。

雄二が言っていた要とはこのことだったのか。彼がいれば心強い。

「光雅、」

「んじゃー俺戻るわ」

「・・・え？」

「いや、肩慣らし終わったし」

踵を返した途端、明久に制服の裾をつかまれて、光雅はつんのめった。

「まさか僕を置いて行ったりしないよね！」

「いや、でも雄二がよ」

「光雅は僕と雄二どっちが大事なの!？」

「は」

何だか「私と仕事、どっちが大事なの!？」と夫に尋ねる妻のようだ。自分で尋ねておきながらそう思った明久だった。

(・・・だけど、ここで本気で困った顔をする光雅には正直、僕もどう返していいか分からない・・・)

同日 光雅

友達を選ぶものじゃないと思う

教師のコメント

どうしたんですか、急に。

第六問（後書き）

・・・知らない。本文書いている途中に出てきた、「召喚獣がやられそうな藤堂」なんて知らないイイイイイイ！！！！（涙）

あ、2000pv越えありがとうございます！

第七問

結局。

明久があまりにも真剣な顔をして頼むものだから、その気力に負けて光雅は場に残る事にした。

召喚獣は未だに世界史指定になっているため、恐らくDクラスの連中に負けることはないだろう。

敵の召喚獣の腹に蹴りを入れさせてから、光雅は横で必死に指示をだす明久の様子をじっと見た。

「・・・・・・・・・・」

「どうしたの？光雅」

見つめられていることに気づいたのか、明久が光雅に顔を向けた。なんでもねえ、そういつて、光雅はまた前を見つめる。だからといって、前から襲い掛かってくる召喚獣の姿は彼の目には入らない。ドスを相手の顔に叩き込んで地面に着地した光雅の召喚獣が、どこか上の空な光雅の顔を見上げた。

「・・・・・・・・・・慣れないな」

ボソツと小さな声で呟いた光雅に、明久が首をかしげた。

『いくら相手が藤堂だろうと、全員でかかれば勝てる！』

『囲めえ!!』

Dクラスの面々が、光雅を囲もうと丸く広がった。

そうはさせまいと、構えた明久。召喚する気だろうか。

だが、Dクラスが二人を囲みきる前に、光雅はその肩を押して、明久を円の外へ追いやった。

「ちょ、光雅!?!」

自分の名を呼ぶ明久の声を聞きながら、外界から遮断された光雅は一人、笑みを浮かべた。

やっぱり、どうも性に合わない。誰かとともに戦うなんて。

光雅のニヒルな笑みを前にして、Dクラス約十数人が身構えた。

やっぱり俺は、無理するぐらいが丁度いい。

「やるぞ。^{カルサーゼ}改造」

光雅の掛け声と共に、召喚獣が上着を脱いだ。ベルトのホルダーにはいくつかのドライバー。黒い帽子は作業用のゴーグルに変わり、召喚獣の頭に装備された。

持っていたドスからは、バチバチと電流が迸る。もち手の部分から延びた導線は、ベルトに備え付けられているポーチの中へと伸びて

いた。この改造モードでのみ使用できる、特殊なものだ。

突如変わった召喚獣の姿に、Dクラス達は怯む。総勢十数匹の召喚獣達が、武器を持ち直した。

「特別とか特殊とか思ふなよ。馬鹿らしーから」

そういつてから、光雅は笑みを深めた。

光雅の召喚獣が、懷から水の入ったボトルを取り出して長ドスの切っ先を地面に向ける。同時に、長ドスが纏う電流の塊が大きさをました。

召喚獣が、ボトルを落とす。

まさかと青ざめた顔のDクラス達は、慌ててそれを止めに入ろうとした。が。

その攻撃が届く前に、長ドスの切っ先が水の入ったボトルを貫いた。

放電。

濡れた地面を伝い、電気がDクラス全員の召喚獣を襲った。

「戦死者は補習ー！ー！！」

西村教諭の怒声が、廊下に響いた。

「光雅、無事だったんだ・・・」

「なんとかな」

「せっかく須川に頼み事したのに」

頼みごと？聞こうとした光雅の声を遮って、廊下に備え付けられたスピーカーからノイズが聞こえ、校内放送の音楽が流れた。

戦況でも知らせるのだろうか。何故だか嬉しそうな顔をする明久の顔を見て、光雅は再びスピーカーに目を向けた。

《船越先生、船越先生》

聞こえたのは、数学の船越教諭（四十五歳♀独身）の名前だ。先生の呼び出しか。

《吉井明久君が体育館裏で待っています》

明久の目が点になる。何となく嫌な予感がした。

《生徒と教師の垣根を越えた、男と女の大事な話があるそうです》

光雅の顔が青ざめた。

船越教諭。婚期を逃して、生徒達に単位を盾に交際を迫るようになった、四十五歳だ。

まさか、明久が熟――

「違うからね！？ 誤解しないでよ光雅！」

だが、明久が自分の貞操を捨ててまで勝とうとしている（本人の意思はない）ことを聞いたFクラスの士気はさらに上がる。
逆に、Dクラスの士気はおちていた。その原因が同情ではないことが彼のせめてもの救いか。

「皆、吉井隊長の死を無駄にするな！」

「絶対に勝つぞーっ！」

既に明久の死は決定していることのようにだ。

暗くなった彼の表情が哀れに思えて、光雅は恐る恐る声をかけた。

「・・・おい、明久」

「・・・」

「・・・明久？」

「・・・・・・す」

「・・・・す？」

「須川 ああああああっつ！」

物凄い形相で叫んだ明久に、光雅は掛ける言葉がなかった。

同日 光雅

本当に相手のことを考えれたなら、掛ける言葉も見つかったはずな
んだけどな・・・・。
すまん。

教師のコメント

本当に、どうしたんですか。

第七問（後書き）

PV3000越え、ユニーク500越え、ありがとうございます。
評価してくれている方、感想をくれた方、お気に入り登録をして
くれた方にも感謝です。

第八問

明久というとうとう犠牲のおかげで士気があがったFクラスだが、召喚獣の強さが変わるわけではなく。

必死にねばってきたFクラスだが、徐々に戦力差の影響が現れ始め、次々と景気の悪い報告が聞こえてきた。

工藤と相川が戦死（補習室送り）。これで十八人いた明久の部隊は、残りわずか五名。光雅を含めても六名しかない。

「明久！あと少し持ちこたえろ！」

遙か後方から、雄二の檄が飛んできた。援軍だ。

よく通る声を聞いて息を漏らしながら、光雅は口角を上げた。

「援軍だ！合流される前に吉井たちを全滅させろ！面倒なことになるぞ！」

真っ先に狙われたのが、光雅の召喚獣だった。なんとしても戦力を削ぎ落としたいようだ。

——こうなると、俺が抑えるしかないな・・・。

世界史の残り点数は200点前後。まだ十分あるとはいえ、受けたダメージが蓄積されているのも事実で、こうなったら改造で持ちこたえるしかないと考えたその時。

「おい若！改造モードはもう使うなよ！」

再び飛んできた雄二の檄。使用制限令が下ってしまった。
仕方がなく、光雅は召喚獣に長ドスを仕舞うよう指示を出す。
鞘に納まった長ドスからは、もう電気は流れていない。

「今だ！突撃いっ！」

狙ったように飛び掛ってくるDクラスの召喚獣たち。

何とか交わしきろうと考えた光雅だが、改造モードを解くにはどう
しても数秒のロスがかかる。Dクラスの召喚獣達の攻撃が光雅の召
喚獣に届いた。

光雅

198点↓178点

「サモン試獣召喚！」

明久が召喚獣を喚び出す。

現れたのは特攻服に身を包んだ明久の召喚獣。

「Fクラス中堅部隊隊長、吉井明久。貴公の相手を——あがあっ！」

出てきたと同時に肩に攻撃を食らう明久の召喚獣。フィードバックにより、明久自身の肩にも激痛が走る。

「・・・明久・・・普通敵が突っ込んでくる最中に試獣召喚するか？」

「だ、だってえ・・・」

涙目になりながら、明久は再び戦闘態勢を取る。

「この部隊長はバカだ！俺一人で十分だから、皆は光雅一人を狙え！」

敵クラスにも好き勝手言われて、さらに傷つく明久。

が、光雅にはそれを気にしている余裕はなかった。

いっせいに武器を向けられた上に、改造モードは使えない。対戦中に召喚獣を消すわけにも行かないので、科目変更も出来ない。

多勢に無勢。

だが。

「逆に、こっちのが燃えるよな・・・！」

どうやら、それが彼のスイッチを入れたようだ。

飛び掛ってきた二対の召喚獣を、長ドスの鞘で殴り、スラリと刀身を引き抜く。

電流を纏っていないとはいえ、感じる威圧感は変わらないようで、Dクラス達は五人で固まって攻撃を始めた。

こちらの数も少ないが、あちらが多いというわけでもない。勝てないことはない。

鞘とドスの刀身両方で迫り来る攻撃を防ぎ、召喚獣たちをなぎ払う。ドスの刃を食らった一匹の召喚獣が戦死する。

「ああっ！霧島さんのスカートが捲れているっ！」

『なにいつ！？』

明久のその声を聞いて、男女両方の注意が明久のほうに向く。その隙を狙って、光雅の召喚獣が二匹の召喚獣を斬りつけた。

「なっ！卑怯よ！」

「戦争に卑怯も何もあるかよ」

そう吐き捨てた光雅。西村教諭が戦死したものを肩に担いで補習室に連行している。

ガッシャアアン！

突如聞こえた破壊音。ガラスが割れる音で、全員の注意がさらに逸れた。

「うわっ！島田さん！そんなものをどうする気だよ！」

聞こえてきた明久の声に、光雅は首をかしげる。島田は確か、本陣へ戻っていたような・・・。
すると今度は何かが噴出す音と共に、白い粉が宙に溢れる。

「島田さん！キミはなんてことを！」

必要以上に島田の名前を出す明久に、光雅は呆れた顔をした。

「Fクラスの島田め！なんて卑怯な奴なんだ！」

「許せねえ！彼女にしたくない女子ランキングに載せてやるからな
！」

「そうだ！在学中には彼氏の出来ない状況にしてやつ！」

「…………でも、男らしくてステキ…………。お姉さま…………」

全ての被害は島田が被ることになりそうだ。

先ほど戦争に卑怯も何もないと断言した光雅だが、早くもその言葉

を撤回したい気分になった。

——明久、流石にそれは卑怯だ。

すると今度は何が原因か、天井に備え付けられたスプリンクラーが作動し、振ってくる水滴が宙を舞う粉を落とし始めた。

「待たせたな、吉井！藤堂！五十嵐先生！Fクラス、近藤吉宗が行きます！」

クリアになった視界で勝負を申し込んだのは、雄二率いるFクラスの本体の一人、近藤吉宗。

あまりにもいいタイミングに、もしかしたら明久は縁の下の力持ちかもしれないと思案する光雅。

『Dクラス	中野健太	V S	Fクラス	近藤吉宗
化学	43点	V S	91点	』

連戦を強いられたDクラス達にとって、力の有り余った真打ちの登場は苦しいものだった。

敵部隊隊長の塚本の命令により、残りわずかなDクラスは撤退を始める。

雄二はそれを追おうとはせず、こちらから撤退を始める。

「さて、無事なようだな。二人とも」

「うん、まあね」

「・・・・・・ああ」

返事をした明久と光雅に満足そうに頷いた雄二は、ふと光雅の顔に手を伸ばす。

「ここ、赤くなってるぞ」

光雅の頬に触れてそういった雄二に、光雅はああ、と声を漏らした。そういえば、改造モードの時に・・・。

元、《観察処分者》の名残だ。ほんの僅かに来るフィードバックには痛みがないのだが、変わりに少し赤くなったり、腫れたりするところがある。

「全く、改造モードはつかわねえって約束だっただろうが」

「しゃーねーだろ。一人一人相手にしてたら時間がかかる」

「・・・・・・ねえ、その改造モードって何？」

そういえば話してなかったか。

改造モードについて説明する雄二の声を聞きながら、光雅は顔を遙か後方に背けた。

同日 光雅

先生、Fクラスは皆こんななのか？

教師のコメント

こんな、とは？まあ、変人が多いことは確かです。

第九問

教室に戻り、テストを受けなおしたその後、光雅は薄汚い卓袱台に足を掛けて寝転がる。綿の抜けた座布団は枕代わりだ。

スプリングラーで濡れた所為か、入ってくる隙間風がやけに冷たく感じ鼻がムズムズする。

「——つくしゅっ」

手で鼻を押さえる前に出てしまったくしゅみ。行き場のなくした手で代わりに鼻を擦る。

ふと、隣からの視線に気づいて明久を見ると、なにやら口元を押さえていた。

「これがギャップ萌えという奴か………！」

「殺すぞ」

どうやら光雅が、顔に似合わない小さなくしゅみをした所為で、明久がおかしくなってしまったようだ。

明久の背後に移動した光雅は、その腕で明久の頭を締める。

「ああ！ごめんウソウソ！意外と可愛いくしゅみでちょっと……え！？なんでさらに力強めるの！？」

顔を青くした明久は、光雅の腕をバシバシ叩く。

そんな中、教室に雄二達が入ってきた。下手をすれば生死をさ迷う状況を見て、雄二は言う。

「明久、よくやった」

「え！？それって試召戦争のこと！？それとも今のこの状況のこと！？ていうか、この状況に関して疑問は抱かないわけ！？」

「それに関してはお前が変なことを言っただろ？」

凶星だ。

光雅の締め技から解放された明久は、雄二の晴れやかな顔を見て、もしやと尋ねる。

「校内放送、聞こえてた？」

「ああ。バッチリな」

明久の予想通りの答えだった。

しかし明久にとって今は校内放送を聞かれたことは問題ではない。というか、校内放送なのだから誰が聞いていてもおかしくはない。それよりも――。

「雄二、須川君がどこにいるか知らない？」

彼が今、一番会いたいののはにつくき須川だった。

「もうすぐ戻ってくるんじゃないか？」

「……………殺すなよ、明久」

唯一、明久が家庭科室から包丁をパクってきたことを知っている光雅が先手を打った。

ついでに、怖い笑顔のまま靴下に砂を詰めていたことも知っている。

「やれる、僕なら殺れる……………！」

「殺るなっの」

光雅の気持ちを代弁するかのように、雄二が言う。

だが、明久の耳には届いていないようで。

「ちなみに、だが。あの放送を指示したのは俺だ」

その言葉で、明久の抹殺対象が須川から雄二に切り替わった。

奇声を発しながら踏み込み、コンパクトに包丁を突き出した明久。

真っ先に、よけにくく致命傷になりやすい肝臓を狙う明久は正気ではない。そう信じている。

「あ、船越先生」

その名前が出た途端、明久は攻撃を中止し、卓袱台を蹴散らかして掃除用具入れに飛び込んだ。

乱暴に閉められたドア。明久が視界から遮断される。

「さて、馬鹿は放っておいて、そろそろ決着をつけるか」

「そうじゃな。ちらほらと下校をしておる生徒の姿も見え始めたし、頃合じやろう」

「・・・・・・・・・・・・・・・・（コクコク）」

下校時刻まで、あとわずか。決着をつけるなら今だ。

今だ掃除用具に隠れている明久を気にして、掃除用具に近づこうとした光雅だが、雄二に肩をつかまれ強制連行される。

——お前ら本当に友達なのか。

教室を出る前に明久に声を掛けた雄二に、思わずそう思った光雅。味方を敵と認識する二人はどうかしている。

「光雅。さっきも言ったが、改造モードはもう使うなよ」

「分かってら」

言った後、光雅は雄二と別れた。

動いてすぐに、先ほどの敵部隊隊長、塚本の姿を見つける。あたりをしきりに見回して、下校中の生徒に紛れようとしているようだ。

見つからないように腰を低く落として、光雅は小さな声で試獣召喚を行った。

塚本がいるフィールドの教科は英語。流石に苦手な教科で相手に勝負を挑む気にはなれない。指定教科は国語だ。

光雅の召喚獣が、小さな体躯で下校をする生徒の間をすり抜ける。ついでに、偶然通りかかった召喚獣を切りつけて、塚本に奇襲を掛けた。

「ん。終わり」

あまりにも唐突過ぎる攻撃に、目が点になった塚本。そんな彼を気にも留めず、光雅の召喚獣が塚本の召喚獣の腹部を突き刺す。塚本の補習行きはこれで決定だ。

上着のポケットからポケベルを取り出した光雅は、どこかに向かつてメッセージを送る。

『ニンムカンリョウ』、と。

電子の文字はそう表示されていた。

暫くして、姫路瑞希の活躍によりFクラスはDクラスに勝利した。

同日 光雅

友達って なんですか

教師のコメント

この一文だけで深い哀愁が感じられます。

第九問（後書き）

次からは光雅の視点で行きたいと思います。

頑張っでは見たんですが、やっぱり第三者風な視点で地の文はやりにくいので・・・。

p5000越え、ありがとうございます！

第十問

物理

問 以下の文章の○に正しい言葉を入れなさい。

『光は波であって○である』

姫路瑞希の答え

『粒子』

教師のコメント

よくできました。

土屋康太の答え

『寄せては返すの』

教師のコメント

君の解答はいつも先生の度肝を抜きます。

吉井明久の答え

『勇者の武器』

教師のコメント

先生もRPGは好きです。

藤堂光雅の答え

『米立子』

教師のコメント

ふざけているんですか。

Dクラス代表 平賀源二 討死

その報せを聞いたFクラスの勝鬨とDクラスの悲鳴が混ざり、俺はDクラスに足を向けた。

中には勝利を喜ぶFクラスと、敗北に肩を落とすDクラスの姿があり、Fクラスは雄二を取り囲んで彼を褒め称えていた。

確かに、彼の作戦なしではDクラスに勝てなかった。今日限りは素直に認めてやってもいい。

教室の入り口で突っ立っている俺に気づいた明久が、俺の腕を引いて輪の中心へと引っ張っていった。

いっせいにこちらを向いたFクラスの面々に、思わず一步後ろに後退る。

もしかしたら、場の空気を壊してしまっただろうか。初対面でもびびられるくらいだ。

だが、それは杞憂に終わった。クラスメイトの一人が俺の肩を叩く。確か、近藤吉宗だったか。

「お前と吉井のおかげで、何とか持ちこたえることができた。ありがとな」

喋ったこともないような奴に、初めて言われた言葉。

そいつの言葉に続くように、Fクラスの面々も俺を取り囲んで、「ありがとう」だの、「見直した」だの、「惚れ直した」だの、「兄貴と呼ばせてくださいえ！」だの、口々に俺を褒める。

「いや・・・・・・・・あの、えっと・・・・・・・・」

なんと返事をしたらいのか分からなくて、それでも何か返さなければと思って何かを言おうとしたが、それでも出てくる言葉は見つからない。

それどころか、もどかしく浮かばせた手を握られて、真正面からありがとうといわれたものだから、余計に俺の頭は白くなる。

どうしよう。困り果てた俺に、雄二が助け舟を出した。

「そこまでにしといてやれ。そういうことには慣れてねえんだよ、そいつ」

一言余計だったが、おかげで俺は何とか冷静になれた。

「・・・・・・・・どういたしまして」

「雄二！僕達も握手を！」

視界の端を颯爽と駆け抜けて、明久が雄二に握手を求める。

「ぬおおっ！」

ガシッ

「雄二・・・・・・・・・・！どうして握手なのに手首を押さえるのかな・・・・・・・・・・！」

「押さえるに・・・・・・・・・・決まっているだろうが・・・・・・・・・・！フンッ！」

「ぐあっ！」

明久が手首を捻り上げられる。悲鳴を上げた明久の手から、先ほど家庭科室からパクってきた調理用の包丁が落ちる。

「・・・・・・・・・・」

「・・・・・・・・・・」

「雄二、皆で何かをやり遂げるって、素晴らしいね」

「・・・・・・・・・・」

誤魔化すように、明久がそういった。雄二は答えない。

「僕、仲間との達成感がこんなに素晴らしいものだなんて、今まで知らな関節が折れるように痛いっ！」

「今、何をしようとした」

「も、もちろん、喜びを分かち合うための握手を手首がもげるほどに痛いっ！」

「おーい、光雅。ちょっとペンチ貸してくれー」

「す、ストップ！僕が悪かった！」

「・・・・・・・・チッ」

謝ったはずなのに、舌打ちをされた明久は、解放された手首を擦って雄二を見た。

「・・・・・・・・生爪・・・・・・・・」

軽くホラーだ。

というか、俺のペンチを血で汚さないでほしい。

「まさか姫路さんがFクラスだなんて……信じられん」

明久の後ろから、Dクラス代表が二人に歩み寄った。

「あ、その、さっきはすいません……」

違う方向から、姫路が駆け寄る。近藤に背中を押されて、俺もそこへ歩み寄った。

「いや、謝ることはない。全てはFクラスを甘く見ていた俺達が悪いんだ。ルールに則ってクラスを明け渡そう。ただ、今日はこんな時間だから、作業は明日からで良いか？」

「もちろん明日で良いよね、雄二？」

敗残の将。勝てば英雄として崇め称えられるが、負ければ戦犯として扱われる。全ての責任は戦の指揮者にある。

しかも、負けたクラスは三ヶ月の間、試召戦争を行使する権利を奪われる。クラス中から恨まれることは間違いない。

そんな彼に同情したのか、明久が雄二に問いかけた。

「いや、その必要はない」

「え？なんで？」

「Dクラスを奪う気はないからだ」

さも当然であるかのように告げた雄二。例のプロセスとやらに關係しているのだろうか。

「雄二、それはどういうこと？せっかく普通の設備を手に入れることができたのに」

「忘れたのか？俺達の目標はあくまでもAクラスのはずだろう？」

「でもそれなら、何で標的をAクラスにしないのさ。おかしいじゃないか」

不満げに言った明久に、雄二は面倒くさそうに返した。

「少しは自分で考えろ。それだから近所の中学生に『馬鹿なお兄ちゃん』なんて愛称をつけられるんだ」

「なっ！そんな半端にリアルな嘘をつかないでよ！」

「おっとすまない。近所の小学生だったか」

「……人違いです」

「まさか……本当に言われたことがあるのか……」
「？」

哀れむような、蔑むような、同情するような目で明久を見下ろす雄二。

確かに、それはいかなものか。

とにかく。雄二は話を戻した。Dクラスの設備は必要ないともう一度告げた雄二に、Dクラス代表はそれでいいのか、と雄二に尋ねた。

「もちろん、条件がある」

「一応聞かせてもらおうか」

「なに。そんなに大したことじゃない。俺が指示を出したら、窓の外にあるアレを動かなくしてもらいたい。それだけだ」

雄二が指したのはDクラスの窓の外に設置されているエアコンの室外機。勿論Dクラスのものではない。
置いているのはスペースの関係でここに間借りしている――

「Bクラスの室外機か」

「設備を壊すんだから、当然教師にある程度睨まれると思うが、そう悪い取引じゃないだろう？」

「いいのか、雄二。それだけで」

「次のBクラス戦の時に必要なんでな」

どうやらDクラスに不利になるようなことはないらしい。そう判断したDクラス代表は、その条件を呑むと言った。

「タイミングについては後日詳しく話す。今日はもう行っていいぞ」
「ああ。ありがとう。お前らがAクラスに勝てるよう願っているよ」
「ははっ。無理するなよ。勝手っこないと思ってるだろう？」

「それはそうだ。AクラスにFクラスが勝てるわけがない。ま、社

交辞令だな」

じゃあ、と手を上げて去っていくDクラス代表を見て、俺は黒板の横に掛けられている時計をちらりと見やった。

そんな俺に気づいたのか、雄二は俺に声を掛けた。

「そろそろ、だろ？行ってこいよ」

「いいのか？」

「ああ。どうせもう解散するしな」

「……………んじゃあ、そうするわ」

ニイツと口角を吊り上げて、俺は雄二に手を振った。

「サンキューな！」

結構、嬉しかったし、楽しかった。

多分、試召戦争に勝てなかったらこんな気持ちは味わえなかっただろうし、勝ててよかったと思えた。

教室から出る前に、後ろを振り返る。

雄二も、明久も、Fクラスの皆も、俺に大きく手を振り返していた。

同日 光雅

俺、Fクラスでよかったと思った。

教師のコメント

馬鹿ばっかだが、悪い奴等じゃないから、そう思えたなら良かったじゃないか。

第十問（後書き）

7000PV越えありがとうございます！

十一問

朝。セットしておいた目覚ましがかけたたましく鳴る。

手探りでそれを探して音を止めた俺は、眠気に負けてそのまま布団の中で目を閉じた。

二度寝。遅刻確定だ。

——ドダダダダダッ！
——バアンッ！

「おはよ——っ！！！」

と、思ったのだがそうもいかないらしい。

蹴破られたドアに、聞きなれた大音声。早く起きないと遅刻どころじゃすまない気がして、俺は重い身体を起こした。

「今からこんなじゃ持たないよっ！早く起きて着替えてさっさとご飯食べる！」

「分かったから叫ぶなよ。頭に響く」

ろくに定まっていない焦点で、俺は寝間着のボタンに手を掛けた。

昨日と変わらない薄汚い教室に入って、俺は早速畳の上に寝そべった。教室にはまだ誰も来ていない。

家から持ってきたスーパールの袋を卓袱台の下に置き、鞆を枕にする。授業が始まるまでは寝ていようと目を閉じた俺の耳に、Fクラス教室の扉が開く音がした。

ボロボロな所為でガタガタと聞こえる大きな音に、俺は片目だけ開けてそちらをみる。

「お、今日は早いな若」

「……雄二か。叩き起こされたんだよ」

「だろうな。目の下に隈ができてる」

雄二のその言葉に、俺は上体を起こして目の下に触れた。鏡なんて見ないものだから、気づかなかった。

そんな俺に苦笑して、雄二は俺の横に自分の鞆を放り投げる。筆記用具がぶつかり合う音がして、鞆は卓袱台の上に着地した。

「ま、学園生活に遅刻は禁物だからな。早く慣れろよ」

「分かってる」

「ならいいんだが」

一時間目は数学のテスト。元から苦手なものを受けなおしても変わりはない。取り敢えず睡眠が重要だ。

俺は再び畳に身を沈め、寝ることにした。

「おいおい。疲れているのは分かるが、一時間目から寝過ぎすなよ」

「三時間目になったら起こせ」

「さりげなく二時間目もすっ飛ばしてんじゃねえよ」

雄二の声を聞きながら、俺は目を閉じた。数学のテスト。監督は船越らしい。明久、強く生きろ。

昨日知り合ったばかりの親友の顔を思い浮かべながら、俺は眠りに着いた。

こうして午前の授業の半分を寝て過ごした俺は、起きた頃にはすっかり元気になっていた。

反して、明久は疲れているようだ。

予告どおり三時間目に起こしてくれた雄二だが、その後で「おはよう」と声を掛けてきた明久の顔は蒼白だった。今だって、声を枯らして机に突っ伏している。

いつの間にか、彼の横に来ていた木下が、明久の言葉に同意していて、続いて無口な土屋もそれに頷いた。

「よし、昼飯食いに行くぞ！今日はラーメンとカツ丼と炒飯とカレーにすっかな」

相変わらず雄二の食欲は旺盛なようだ。彼の胃の大きさが気になる。

「ん？吉井たちは食堂に行くの？だったら一緒にいい？」

「ああ、島田か。別に構わないぞ」

「それじゃ混ぜてもらうね」

「・・・・・・・・・・・・・・・・（コクコク）」

「昼食は何がいいかの。光雅よ」

卓袱台の下に置かれたスーパ－の袋に手を伸ばすと、不意に木下に声を掛けられた。

すると木下は俺の机の上に置かれている弁当に気づいたようで。

「お？光雅、それは――」

「あ、あの。皆さん・・・・・・・・」

上手い具合に木下の言葉を遮って、姫路が明久達に声を掛ける。

「うん？あ、姫路さん。一緒に学食に行く？」

「あ、いえ。え、えっと・・・・・・・・、お、お昼なんですけど、その、昨日の約束の・・・・・・・・」

お昼で昨日の約束というと――

「弁当の話か」

「は、はいっ。迷惑じゃなかったらどうぞっ」

後ろに隠していたバックを出した姫路。律儀に昨日の約束を守ったようだ。健気な子だな。

感動したように目をきらきらさせた明久が、幸せそうな顔をしている。

「迷惑なもんか！ね、雄二」

「ああ、そうだな。ありがたい」

「そうですか？良かったあゝ」

安堵したのか、ほにゃつと嬉しそうに笑う姫路に場の空気が和んだが、島田だけは姫路を親の敵であるかのように睨んでいる。
女という生き物は何だかよくわからない。

木下の提案により、屋上で昼食を取ることになり、それならばと雄二と島田は一回の売店に飲み物を買いに行った。

「どうしたの光雅。早く行こうよ」

未だに卓袱台の前に座っている俺に、明久が声を掛ける。

持って行こうか持って行くまいか迷った後、俺は卓袱台の下で放置されているスーパールの袋を引ったくり、明久達のところまで駆けた。

「天気が良くてなによりじゃ」

「そうですねー」

屋上へと続くドアの向こうに広がる、抜けるような青空。絶好のお弁当日和だ。

姫路がシートを取り出したので、俺はそこら辺からシートを押さえる石を探し出す。

石は三つ見つかったが、重石はひとつ足りない。仕方がなく、俺は

シートの隅で弁当の包みを広げた。

「いただきます」

「あれ。光雅ってお弁当自分で作ってるの？それともお母さんに？」

俺の弁当の中身を覗き込んだ明久が尋ねる。

俺が両方に首を振ると、明久は酷く驚いた様子で座ったまま後方へ後退りをした。

「まさか。君だけは僕を裏切らないと信じていたのに・・・！」

「・・・・・・・・・・その話、詳しく」

「ほう。光雅に恋人がいるとはな」

勘違いだ。

全員に同じ勘違いをされて、俺もどうしたらいいか迷う。

あれが彼女だと？ありえない。

「・・・・・・・・・姫路の飯、食わなくていいのか？」

話をそらすように彼女が取り出した重箱を箸で指す。中身は豪華な料理ばかりで、とても美味そうに見えた。

みんなの目が姫路の重箱に向いたところで、改めて俺は弁当を食べ始めた。うん、美味い。

姫路のと違って質素なものばかりだが、味が良く染み込んでいてと

ても美味かった。

味わうようにゆっくりと咀嚼していた俺の前に、土屋が倒れこむ。

「むぐっ!？」

豪快に頭から倒れこんだ土屋に、思わず噛み切っていないおかずを飲み込んでしまう。

ちよつと苦しかったが、今はそれどころではない。

土屋の身体は、何かの拒否反応のように痙攣していた。

「わわっ、土屋君!？」

驚いた姫路が、配ろうとしていた割り箸を落とす。

「おい、大丈夫か!？」

「・・・・・・・・・・・・・・・・（ムクリ）」

土屋が起き上がる。

「・・・・・・・・・・・・・・・・（グッ）」

姫路に向けて親指を立てた。

「あ、お口に会いましたか？良かったですっ」

姫路が嬉しそうにそういった。

だが、起き上がった土屋の足は未だガクガクと震えている。
まさか。

その後、数人の犠牲を出した姫路の料理は、俺の中で嚴重注意物の
タグをつけられた。

「ああ、僕の昼食・・・・・・・・」

うなだれた明久に、俺は脇に置いていたスーパーの袋に目をやる。
飯ではないが、無いよりはましだろうと袋を引っ掴み、明久に手渡
す。

「え？これ・・・」

「駄菓子。あと乳酸菌飲料。家から持ってきた」

「もらっていいの？」

「ん。家には大量にあるからいい」

それはもう、消費しきれないくらい。

別に買いだめているわけではなく、近所に住む人が毎日のようにおすそ分けをしてくれるのだ。

なんなら明日も持ってくる。そういつて明久を見ると、彼は目から大量の涙を流して俺の手を握った。

○月△日 光雅

明久に仏のように崇められた。

教師のコメント

貴方一体何をしたんですか。

十一問（後書き）

途中ハシヨりました。すみません。
近隣の人たちに人気の不良（笑）

p v 8 0 0 0 越え&ユニーク10000越えありがとうございます！

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6334u/>

バカと不良と青春記

2011年10月9日10時24分発行